

これまで何度か、いろいろな演能会のパンフレットに、この曲の解説を書いてきた。しかしいづれも、枚数の関係もあり、中途半端なものだった。「清経」について書くのは、恐らくこれが最後だと思うので、これまで発表した部分と重なるところも多いと思うが、少したつぷり書かせてもらおう。

平清経は、清盛の嫡男・重盛の三男である。長兄が維盛である。彼もまた平家の嫡流でありながら、後に熊野で入水し、戦線から離脱している。清経に關する詳しい事蹟は、ほとんどわかっていない。事典類を見ても、いづれも数行で片づけられている。それも『平家物語』や『源平盛衰記』の記述がもとになっている。『平家物語』には流布本が多く、各本によって記述の量も異なっている。むしろ『平家物語』異本の一つと考えられている『源平盛衰記』が一番詳しい。それらの書物の記事を総合すると、正四位下に叙し、左近衛権中納言に任ぜられているが、戦の方は決して得意ではなかったようだ。対頼朝との

富士川の戦にも、また木曾義仲との俱利伽羅峠での戦にも参加した様子はない。

寿永二年（一一八三）七月、木曾勢に追われて、平家一門が安徳帝を奉じて都を脱出する際に、清経は妻を同道しようとして、父母にたしなめられている（『源平盛衰記』による。但し、父重盛は治承三・一一七九年すでに没しているので、これは虚説）。

それから「三年が程であるかなきか言伝もなかりければ」と『盛衰記』にある。これも「三ヶ月」の誤りである。七月に都を出て、北九州を転々とし、翌寿永三年一月には福原に戻り、一谷に陣を構えている。清経が豊前国柳ヶ浦で入水したのは、それ以前、寿永二年の晩秋である。清経の生年や享年は不明である。残されたわずかな資料で、世阿弥は興味深い人間像に描き上げ、魅力的な修羅能を作った。修羅能のたてまえからすれば、ある武将の戦死した土地を通りかかった旅僧の所に、武将の幽霊が現れ、自分が戦で敗れた様子を物語り、修羅道の苦患を見せ、成

仏できるように回向を頼む、というのが定型である。しかし能「清経」はすっかり違った構成になっている。まずワキは僧侶ではなく、淡津の三郎という清経の家来が、清経が形見として残した遺髪を、京に隠れ住む妻のもとにとどける。この淡津三郎という人物も作者の作りあげた架空の人物である。この話は『平家物語』では全くふれていず、『盛衰記』では生前に送ったとしている。入水の際に鬢の髪を切って船中に残した、というのは作者の見事な創作である。

もともと世阿弥は、修羅能はあまり好きでなかったようだ。彼は最初の伝書『風姿花伝』の「物学条々」で（修羅）について、「これまた、一体のものなり。よくすれど面白きところ稀なり。さのみにはすまじきなり」と言い切っている。これは応永七年（一四〇〇）世阿弥三十八歳の時の発言である。この時点では、偉大な父・観阿弥の遺訓が、彼の能楽観に大きく影響していた時期である。当時は「これ体なる修羅の狂ひ、や、もすれば、鬼の振る舞ひになるなり」と思える修羅能が多く演じられていたようである。観阿弥はそれを嫌い、世阿弥もその考えに同調していたのであろう。

観阿弥は従来の大和猿楽にいろいろな改革をなし

新人間修羅能の一番古いものは「通盛」である。井阿弥原作を世阿弥が改修したこの能が、新しい修羅能の始まりである。「清経」が何時書かれた能であるかは定かではないが、私は比較的早いのではないかと思っている。それは、世阿弥が完成した（複式夢幻能）の形成をとっていないことと、ワキの扱いによる推測であって、充分な確証はない。

この曲でのワキの扱いは異例である。普通、能はワキの登場、名乗りで始まる。（もともと、ツレが先に出て、ワキ座に下居する「出シ置キ」という手法をとる能がないことはない。それからもう一つ、観世流など上掛り（観世・宝生の二流）では、ワキはツレに遺髪を渡すとさっさと切り戸から退出する。しかし金剛流の場合、ワキはキリまで居残る。そして、夫婦の中の会話の中に加わってきて、「世の中のうさには神もなきものを、なに祈るらん心づくし」と宇八幡宮の託宣を告げるのもワキの役である。（観世ではシテが謡う）理屈をいえば、妻の夢の中に、清経の亡霊が現れるのである。夫婦の会話の中に、現実の人間であるワキが加わるのは不自然であり、ツレの間に、第三者たるワキが居るのも非常識である。劇の進行上不用になった人物を、舞台から退場させ

とげたが、修羅能に関しては、それほど熱心に取り組んでいなかったようで、今に残る作品は書いていない。したがって「物学条々」の（修羅能）に関する後半の記述である「ただし、源平などの名ある人のことを花鳥風月に作り寄せて、能よければ、何よりもまた面白し。これ、ことに花やかなるところありたし」という発言が、観阿弥の潜在的な本意であったのか、世阿弥の可能性を秘めた発言であったのか、私にはわからない。

そして、二十三年後の応永三十年（一四二三）の奥書きのある『三道』では、修羅能を（軍体の能）と言い変えてはいるが、「軍体の能姿、仮令 源平の名将の人体の本説ならば、ことにことに平家の物語のまゝ、に書くべし」と繰返して言う。大よそ、三体の能（老体、女体、軍体―筆者註）、「近来押し出して見えつる世上の同体の数々」のうち、軍体では、「通盛、薩摩守（忠度）、実盛、頼政、清経、敦盛」の六曲が良いとしている。いづれも世阿弥がかかわったものである。今日我々が修羅能として扱っている能は、世阿弥が修羅能を鬼の風体から人間の苦惱の風体へ改修した以後のもので、それ以前の作は残っていない。

るのが合理的であり、第三者のいない方が、夫婦間の関係がより親密になる。観世流がワキを排除したのは、演劇的テーマをより鮮明にするための改修であり、演劇的には進化したものと見られる。ワキが居残るのは、古くはワキが地謡を謡っていたという、従来の古態を残しているのかと思われる。

さて、シテの出である。今回は（披講之出端）の小書きがつく。「枕や恋を知らすらん」と地謡が低音で謡いおえると、笛方は座をすすみ、揚幕に向って、特殊な譜の音取りを吹く。（大小鼓はそれぞれの道具を下に置き、休息）シテは笛の音にひかれるかのようになりに静かに幕を出る。笛が途絶えると立止まり、吹き出すとまた歩く。シテ方にとっても、笛方にとっても、現在は重い習物になっている。当初はもともと普通の笛のアシライであったと思う。「披講」は「詩歌の会や歌会合せなどで、詩歌を詠みあげ披露すること」であり、「出端」は諸役の登場のことであるから、この演出にはふさわしい名称とはいえない。その点、観世の（恋之音取）は艶っぽい名称付けである。ともあれ、本来は今日のような重々しい習物でなかったことは確かである。

それから清経の形見の髪是件であるが、先にも

少しふれたが、『平家』の流布本にはなく、『盛衰記』と『平家』の延慶本、八坂系の本には、生前に送ったのを、妻が送り返したととなっている。入水の直前に、横笛を吹き今様を謡って、鬢の髪を切ったとするのは、能作者の秀れた創作であるが、金剛本では、シテはワキに対して「二度贈る黒髪の」と言っている、「見るたびに心尽くしの髪なれば」と送り返す妻は非常に強い女という印象が残る。ともあれ、生死を別にする相愛の夫婦が、さめざめと泣き合う場面はよく描かれている。『隣忠秘抄』という古書に「この能の大意恋慕なり」とあるのも当を得ていると思う。

つづいて床几にかかつて「西海四海の物語申し候はん」と戦物語になるのだが、戦語りは軍体の能の常とは言え、「この上は怨みを晴れ給え」と、何故自分が討死するまで戦わず、入水したかの言訳けとして語られる。『平家』のま、書くべし、と言いなながら『平家』よりずっと、説得力のある名文になっている。

宇佐八幡宮に参籠し、祈誓の末に得た神託は「世の中の憂さには神もなきものを、何祈るらん心づくしに」——平家を救う神など宇佐にはないのに、というひどくそっけないものであった。ここで金剛流本

では、「新中納言取りあえずへさりととも、思う心も虫の音も弱り果てぬる秋の暮かな」と詠んだとしている。（観世流では、誰が詠んだか明記せず、地の文のように扱っている。）正しくは『千載集』にある藤原俊成の歌の由であるが、せつかくの丁重なる捧物をして上での祈誓にもかかわらず、あまりに無愛想な神託に対して、平家方の大将として、取りあえず一言言っておきたかったのだろう。

「本より何事も思入りける人」と『平家』は清経の事を書いている。考え深く、行動性に欠けたインテリが、心ならずも戦争にまきこまれてゆく悲劇。まだ緒戦であるにもかかわらず、早くも平家の前途に危惧をいだき、武将としての自信も実力もなく、抗戦のおろかさ、敗戦のみじめさを清経は人一倍考え悩んでいたであろう。宇佐の神に見放され、敵襲の噂に、一門は東へ走り西へ逃げ、「白鷺の群いる松見れば 源氏の旗をなびかす多勢かと肝を消す」と言った毎日に、清経は精神的に完全にまいっていた。平家の未来には一条の光明も見出せない。追いつめられた運命に立ち向かってゆく勇氣もない。「雑兵の手にかからんよりは」というプライドだけが、わずかに残されていた。

「絶望とは死にいたる病である」というキルケゴールの言葉を地で行ったように、清経は自殺するより他に道はなかった。もし戦争がなければ、愛する妻と別れる必要もなく、死とも無縁な人間であった。華々しく戦死した若い公達とはまたちがった哀れさである。「清経」という作品は、イデオロギーからの反戦ではなく、生活の実感としての厭戦を訴える能である。戦後この曲の愛好者が急増した理由の一つである。もっとも「絶望」という概念は、近代の産物であり、清経の心情には適切でないかも知れない。諦念、天野氏の言う「思想としての無常」とする方がより適切であるかも知れないが、世の無常を深く悟得した人物ならば、自殺はしなかつただろう。禅宗の悟の境地は、清経には縁遠く、作者の世阿弥が、禅と深くかわるのは晩年のことである。

能「清経」では、心静かに入水の有様を告げたあと、突如「さて修羅道にをちこちの」と修羅道の様を語り出す。『三道』の中で軍体の能を作る手本にせよとあげている六曲のうちには、全く修羅道のことにはふれていない曲もある。そのことから「清経」では、まだ古修羅能の尾氐骨が残っているような気がする。それでいて、すぐそのあとに「真は最期の十念乱れ

ぬ法の舟に頼みしままに、疑ひもなく、げにや心は清経が、仏果を得しこそ有難けれ」と結んでいる。世阿弥は「清経」の制作中、まだ、古修羅と軍体の能との間をさまよっていたのであろうか。